

## 書評

成瀬尚志編著

### 『学生を思考にいざなうレポート課題』

(ひつじ書房、2016年)

大庭 弘 継

学生にレポートを課す。教員にとって、一般的な成績評価の方法である。だが教員は、どんなレポート課題を提示すべきなのか。そもそも、レポートをつうじて、教員は学生に何を求めているのか。

筆者自身もこう書いている、「そもそも、自分はこの論題で何を問いたかったのだろうか」(2頁)、と。そして、答える、「私たち教員がレポート課題で見たいのは、レポートとしての完成度もそうですが、それ以上に学生がどれほど思考を巡らし、試行錯誤しながらレポート課題に取り組んだか」(5頁)だ、と。学力を評価するテストと異なり、レポートは「執筆する過程そのものが学びの一部」(9頁)なのだ、と。

そこで本書は、レポート課題を切り口にした授業設計を提案する。その本書の構成は以下のとおりである。すなわち、「第1章 なぜレポート課題について考えるのか」、「第2章 論証型レポートについて考える」、「第3章 レポート論題の設計」、「第4章 レポート課題を軸とした授業設計」、「第5章 学生が自分で問いを立てるための授業デザイン」、「第6章 レポート課題を評価するとき」、である。

すぐに応用可能なレポート課題の提示方法をいくつか抜き出してみよう。

レポート課題において教員の頭を悩ませるのは剽窃の問題である。本書は、剽窃を招きやすいのは、「授業内容についてまとめなさい」や「(授業で説明した)正義とは何かについて説明しなさい」といった論題だと指摘する。というのも「回答のための素材がたやすく入手でき、さらにその素材を加工しなくても、そのまま書き写したり、コピペするだけで、論題に答えることができるため、「自分で考えようという動機を学生が持つことが難しく」なる出題だからである(45頁)。

そうではなく本書では、学生に創意工夫を求め

る出題を提案する。では、どんなものがあるのだろうか。

まずは形式面の創意工夫である。たとえば、「正義とは何かについて対話篇で論ぜよ」や「授業内容を的確に表すキャッチフレーズを考え、なぜそのキャッチフレーズにしたのかについて説明しなさい」といった形式指定型や「リバタリアニズムとはどのような立場でしょうか。重要なポイントを3つ抜き出し、なぜその3つが重要であるかについて説明しなさい」といった分解・抽出型の出題方法がある(48-49頁)。

次に内容面での創意工夫を求める方法である。たとえば、ある命題の「具体的事例を、テキストに載っている事例以外で挙げよ」という具体例提示型(51頁)や、ある用語を「説明しなさい。その際、どのような文献をなぜ調べたのかなど、レポート執筆のプロセスも含めて書きなさい」という学習プロセス型、ある用語の説明を求めたうえで「授業を受けたことで、あなたの理解がどのように変化したのかも説明しながら論ぜよ」という before-after 型などが例示されている。

つまり、剽窃が困難となる論題とは形式や内容に特異性を持たせた論題であり、裏を返せば、オリジナリティを学生に持たせることができる出題であるといえる。

これを本書のコラム(66-68頁)にある別の表現を用いるなら、「想像力をかき立てる「シバリ」」と呼ぶことができる。このコラムで紹介されている事例は次のようなものである。例えば、調理実習でみんなが好きな料理を作ってくれという授業はあまり盛り上がりなかったが、「みんなが用意してきた空のお弁当箱に詰める料理を作ってください」と指示したところ大盛り上がりだった(67頁)。つまり「「空のお弁当箱に料理を詰める」という「シバリ」が学生たちの想像力をかき立て、モチベーションの向上につながった」(同頁)のであった。

また、出題に際しての注意事項も指摘している。論証型レポートは客観性を重視するが、これは学生に対して、「あなたがどう思うかはどうでもよい」というメッセージを含意してしまい、学生は「自分の考えることなんて意味がないんだ」と思っ

てしまうかもしれない。そこで「あなたの書くものに価値がある」ことをまずは伝えておく必要があると本書は指摘する。(79-80頁)

さらに本書は、オリジナリティを引き出す方法についても示唆を与える。たとえば、学生のレポートのなかに過去の哲学者と似た発想をみることがあり、「以前にこれこれという哲学者があなたと似たこういう発言をしていたけど、あなたはこれと自分はどこが違うと思う」と聞いてみると、いろいろと違いを思いついてくれる」と述べている(103-104頁)。

以上の知見は、レポートという特定の主題にとどまらない重要な示唆を含んでいる。評者もこれらを、評者のルワンダにおけるフィールドワークに応用できると考えている。本書は、ハウツー本ではなく、ディシプリンを超える応用可能性に満ちた、応用哲学の著作であることを強調したい。

稲葉振一郎著

『宇宙倫理学入門——人工知能はスペース・コロニーの夢を見るか?』

(ナカニシヤ出版、2016年)

大庭 弘 継

そろそろ、「グローバル〇〇」という呪縛から抜け出すべき時期なのかもしれない。2018年のいま、民間ロケットや宇宙資源探査などの計画が大きく動き出すとともに、火星植民をめざすマーズワンプロジェクトや約4光年離れたアルファ・ケンタウリに探査機を送るブレイクスルー・スターショットなど野心的な計画がまじめに語られるようになった。そう、時代は宇宙に向かいつつある。

宇宙へと向かおうとする現代において、本書『宇宙倫理学入門』は時宜を得た著作である。「現在我々が踏まえているリベラルな倫理学、道徳哲学の観点から、許容されうるような宇宙開発、とりわけ人間の宇宙進出、宇宙植民とは、果たしてどのようなものになりうるのか?」という筆者の問いは、人類共通の問いではなからうか。

そのためだろうか、本書の射程は非常に広い。第1章でリベラリズムに立つことを宣言し、第2章でスペース・コロニーを考察し、第3章で宇宙植民の意味を考察する。さらに第4章で恒星間航行、第5章で自律型・人格型ロボット、と思考をはばたかせる。だが、第6章で「宇宙SF」の現在を振り返り、第7章でリベラリズムを再考するなど、現代に回帰する構成をとっている。

本書の意義は、一般に意識される「地球から宇宙へ、現在から近い将来へ」という狭さも超えて、「宇宙からさらに遠い宇宙へ、未来から遙かな未来へ」と、応用倫理学の射程そのものを延伸している点にある。さらに宇宙開発と、従来は別の分野と見做されていた人工知能などの問題と結び付けて議論している点も興味深い。

もちろん、応用倫理学という分野全般から眺めたとき、「入門」というにはいささか本書の射程は狭いように思える。筆者自身、「そもそも現実問題として宇宙植民はなされるだろうか」「そもそも宇宙植民などという事業はなされるべきか、